

シェイク・ナスルディンの馬

イーシャ・サーデサイによる再話

インド北部にあるラクナウの通りを、シェイク・ナスルディンが意気揚々と歩いていました。頭上には脈動する黄色く丸い太陽がありました。彼には使命があり、その使命とは馬を買うことでした。彼はこれまで一度も馬を持ったことがありませんでしたが、この暑さと、もうすぐモンスーンもやって来ることから、馬は旅をして目的地にたどり着くためには間違いなく最良の方法でした。

ナスルディンがようやく馬商人に馬小屋で出会うと、売買は短時間で行われました。ナスルディンが商人に硬貨の詰まったかなり大きな袋を手渡すと、商人は馬を引き出してきました。その馬は大きくて強く、見事な茶色の馬毛が日の光で輝いていました。

その動物を見ると、ナスルディンの目は興奮で大きく見開かれました。そして、商人が何も言えないうちに、ナスルディンにこのとても大きな新しい責任について説明もできないうちに、ナスルディンは馬の首に手を伸ばしました。彼は動物の背中によじ登り始めたのです。

「待て、待て、どうすればいいのか教えるから！」と、商人が叫びました。

ナスルディンは、どうにかして、不格好にも何とか馬に乗り、手を振って彼を払いのけました。「大丈夫だ」と、彼は言いました。「ほらね」。彼は何だかんだ言いながらも、わずかに息を切らしているだけでした。

ナスルディンは脚で馬の脇腹を押し、すぐに彼らは道を小走りで駆け出しました。

「ちょっと待て！」 商人はもう一度叫び、ナスルディンを追い掛けました。「戻って来い！ あんたは本当に馬の乗り方を知っているのか？」

「ああ、教えてもらってなかった」と、ナスルディンは肩越しに言いました。「でも、それほど難しいことなのかい？」

そうして、満面の笑みを浮かべ、ナスルディンは馬に乗って町をのんびり回りました。彼らはたくさんの商店や露店の前を通り過ぎました。馬は時々露店の前で止まり、興味深そうに辺りを見回し、そして時には商品の匂いを嗅ぐことさえしました。

しばらくして、ナスルディンと馬は、農産物やその他の食品を売っている露店に通り掛かりました。その露店には、熟れた甘いマンゴー、みずみずしい紅色のリンゴ、サトウキビや葉物野菜の束などが積み上げられていました。露店の前には茶色い大袋が並べられていて、それぞれに違う種類の豆や穀物、レンズ豆などが、あふれんばかりに入っていました。

馬はこのいっばいに並べられた食べ物を一目見て——他には何が、とばかりに——それを目指して走りました。露店に着くと、馬はすぐさまひよこ豆の袋の中に頭を突っ込みました。

ナスルディンは信じ難い面持ちで、馬が絶え間なくむしゃむしゃ食べる様子を見ていました。彼としては、馬がこんな風に突進するとは想像していなかったのです！ 幸いにも、彼は間に合って馬のたてがみをしっかりつかみましたが、危機一髪で落ちるところでした。

「おい！ おい！」 その瞬間、ナスルディンは、どこか近くから聞こえてきた怒声で物思いから引き戻されました。

「どういうつもりだ？」 その声が怒鳴りました。「止めさせろ！」

ナスルディンが振り向くと、こちらに向かって飛んで来る露店の主人を見つけました。男は目をむき、細長いつえを手にして振り回しています。

「俺のひよこ豆から離れろ！」と、男は大声でわめきました。

ナスルディンが起こっていることに気づく前に、その男は馬に向かってつえをふるいました。1回、2回、3回と、彼は馬の脇腹をたたきました。とても激しく。

かわいそうな馬は、袋から頭をぐいと引き抜きました。ひよこ豆が辺りに飛び散りました。馬は手につえを持った店主を見て、恐怖でいなくなりました。男は、今度は片付けなければならない散らかりように、さらにひどく怒ったように見えました。その男が次に何をするか見るのを待つこともせず、馬は前脚を蹴り上げ、突然駆け出しました。

馬は店主からできる限り遠ざかろうと、どんどんスピードを上げながら駆けました。ひづめが土の道にたたきつけられ音を立てました。不幸にも、その音は馬をさらに追い詰め——さらに速く走らせてただけでした。

その乗り手に関しては…そう、この時点で、シェイク・ナスルディンは馬の背に腹ばいになり、命がけで馬の首にしがみついていた。ナスルディンは手綱を、馬の速度を落とし、制御するための何らかの手段を、必死に手探りで探しました。しかし、彼に感じられたのは、その動物の大きくがっしりした胴回りだけでした。ようやく、彼は気づきました。手綱はないのです。彼は馬商人がそれを付けるのを待たなかったのです。

その瞬間、馬が突然向きを変え、ナスルディンはつかむ場所を失い、座っていた所から押しやられました。気づく間もなく、彼は馬の脇を滑って下側に滑り込み——そして今やどういう訳か、不可解にも、馬の真下で、持ち上げた両腕で馬の首をつかみ、胴体を両脚で挟んでいたのです。

馬は、乗り手の苦境に気づかないのか、はたまた無関心なのか、ただ走り続けました。やがて彼らは別の市場を通り抜けました。大勢の人がどんどん近くに集まって来ました。馬のすさまじい走り、逆上したさまは、見物人を引き付けたに違いありません。人々はもっとよく見ようと少しずつ近づき、互いに肘で突いたり指さしながら、好奇心と心配の混ざった表情を浮かべていました。馬の腹にしがみついているのは、あれは人なのか？

見物人の一人が群衆の前に出て来ました。「あれは僕の友だちだ！」と、彼は叫びました。「ナスルディンだよ！」

「ああ、ナスルディン！」彼は大声で叫びました。「何が起こっているんだ？ どこへ行くんだ？」

少しの間がありました。それから、馬の下からシェイク・ナスルディンのくぐもった声が聞こえました。「分からないよ」と、彼はうめきました。「馬に聞いてくれ！」

